

医学部予備校
富士学院
学院長

坂本友寛



2023年問題による、医学部教育カリキュラムの変更を受けて 医学部受験の現状と これからの予備校に必要な

2017年度入学者より、全ての医学部で教育カリキュラムが国際基準に準じたカリキュラムへと変わっていく中、今後、医学部受験はどう変わっていくのか、受験生への影響や今後の予備校としての対応について医学部予備校富士学院の坂本学院長にお聞きしました。



平野 日本の医療界は今、多くの課題に直面しています。新聞やニュースなどでクローズアップされているのは医療財政の問題ですが、医学部の現場では2023年問題のクリアが課題となっており、各大学が対応に追われているようです。この2023年問題というのは、あまり聞き慣れませんが、どのような問題なのでしょう。

坂本 はい、簡単にお話しますと、今までは日本の医

学部を卒業すれば、自動的にアメリカの医師国家試験が受験でき、アメリカでの医師免許を取得することができたのですが、2023年度以降についてはWFME（世界医学教育連盟）による国際認証を受けた大学を卒業しなければ、アメリカで医師として活躍することができなくなるというのが2023年問題です。医学部のカリキュラムが6年間なので、既に実施している大学もありますが、逆算すると来年度の2017年度入学

株式会社CMP
代表取締役
教育ジャーナリスト

平野晃康



役割について

者からが本格的にその対象となります。

平野 それが問題になるということは、日本の現行の医学部カリキュラムではWFMEから国際認証を受けることができないということなのですね。

坂本 そうですね。今は医療もグローバルな時代ですので、日本だけではなく世界を視野に入れるとなると、国際認証は必須となります。そのため、日本の全ての大学が国際認証を受けるためのカリキュラムに今、変わってきています。

平野 アメリカやカナダなどには、多くの日本人医師が留学していますが、これらの国で医療行為をすることが出来ないということになれば大問題です。

日本の大学が行わなければいけないカリキュラムの改革は、どの様なものなのでしょうか。

坂本 はい、まず大きく変わるのが臨床実習の時間が今の約1年間から約2年間になり、参加型の実習

が大幅に増えます。国際基準でいうと、医師国家試験に合格し、医師免許を取得した時点で、ある程度の臨床ができるというのが基本なんです。日本の場合にも2005年から参加型実習が導入されましたが実習期間が今まで約1年間しかなかったため、どうしても見学が中心の実習となり、ほとんどの医師が医師免許を取得した時点では実践的な臨床を行うことがあまりできなかったんですね。そのため、今回の新カリキュラムでは臨床実習の時間を長く取ったカリキュラムに変わってきています。

平野 医学部は一般学部比べて留年率が高い傾向にありますが、このカリキュラム変更によって、より留年者が増える方向に進むのではないかと予想されます。

坂本 いや、まさしくその通りで、臨床実習の時間が増えるということは、その分、基礎医学や臨床医学などの座学の時間が減ることになります。医師になるための必要な学習の量や質はこれまでと変わらない中、授業時間が大幅に削られる新カリキュラムは、今までのカリキュラムでも単位が取れずに留年する医学部生が多かったことを考えると、当然、今まで以上に留年者が増えることが予想されます。

平野 今の学習内容でも留年者が多数出ているほ

ど負担が大きいのに、授業時間や期間が短くなると、医学部生には非常に大きな負担がかかることになりそうです。

坂本 そうなんです。ただそれだけではなく、教える側にとっても負担が大きく増えることになり、留年者が増える懸念を含め、新カリキュラムの対応については各大学共に正直、頭を痛めている部分は大きいと思います。

平野 長期間の臨床実習はアメリカのメディカルスクールのカリキュラムを基準としたものだと思いますが、メディカルスクールは日本の大学院に相当しますから、その基準を日本の医学部に当てはめるのは問題がありますね。

その基準に合わせるとなると、日本の医学部はより高いレベルの意識と能力を持った生徒を選抜しなくてはならなくなります。そうすると、医師になる選抜試験である医学部入試に変化が起るように思われます。

坂本 そうですね、少なからず影響は出てくると思います。医学部の使命は入学させた生徒を、できる限り6年間で卒業させ、医師国家試験に合格させ、社会に貢献できる良医へと導いていくことです。そのことを考えると、大学としてはさらに厳しくなるカリキュラムに変わっても、最後までしっかりとがんばっていけ

る、そういう自覚や覚悟を持った生徒を入学させたい、という流れがこれまで以上に出てくると思います。

平野 そうすると、受験生の人物評価が大切ということになりますから、面接試験が今まで以上に重要になってきますね。

坂本 はい、私もそう思います。今まで面接試験を行わなかった東京大学も平成30年度入試から面接試験を行いますし、私立の帝京大学医学部も来年の平

成29年度入試からは2段階選抜方式に変え、一次合格者を出したのち、一次合格者に対し、時間をかけ、面接試験を行うやり方によって変わっていきます。今後は、面接試験や小論文試験がさらに重要視され、合否に占める割合が各大学共に総じて高くなっていくと思います。

平野 面接試験は受験生の考え方を問うものです。そのような試験が実施されるのであれば、予備校の役割も必然的に変化せざるを得ませんね。

坂本 はい、大きく変わってくると思いますね。まず、一番には勉強だけを教えればそれでいいかというと、そうではなくなるというか、それだけでは合格がおぼつかなくなってきます。医学部に合格するためには、当然学力は必要ですが、学力だけではなく、医師としての資質や、今後さらに大変になる医学部6年間でどう頑張っていけるかなど、面接試験を通して様々な角度から受験生の本質が問われることになります。医学部に入るということは、医師になるということであり、受験生にはその自覚と覚悟が必要ですが、それらをどう促していくのかという様々な学習環境も、医学部を目指す予備校には今後、更に求められてくると思っています。

平野 少し質問が変わりますが、医学部受験の専門予備校

と、いわゆる大手予備校の違いは何でしょうか。

坂本 おそらく一番違うのが、大人数の一斉授業なのか、少人数制の授業なのかだと思います。当然、大人数の一斉授業のほうが授業料が安くなり、専門予備校になると少人数の分、一般論として授業料は高くなります。ただ、ここでぜひお話ししたいことは、もちろん金額も大事ですが、それ以上に目標を叶えることのほうがもっと大事だと思うんですね。大事なことは目標を叶える上で、本人にとって一番必要な、学習環境を



従来の予備校としての考え方を変えていくべきです

見つけることだと思います。それが大手予備校であれば金額も安く、経済的な負担も軽くなりますが、その分、大人数の一斉授業の中で集団に埋もれてしまえば、十分に学力を向上させることができず、一番大事な時間を失うことにもなりかねません。

平野 確かに、1年間は大きいですね、いつまでも高校内容を学習するのではなく、早く医学部に入学し医学を学ぶ方が有益な時間の使い方だと思います。ところで、医学部では浪人生よりも現役生を望む大学が増えているように見えます。

坂本 そうですね、この新カリキュラムに変わっていくことで、さらにその傾向は強くなっていくと思います。浪人生や多浪生がダメだということではありませんが、“医学部にはできるだけ早く行く”それが鉄則なので、できるだけ遠回りにならないように、また進路を変更しなくていいように自分自身に一番合った、また必要な学習環境のもと、勉強を進めていくことが絶対に必要だと思います。もっとも少人数制であればどこでもいいわけではなく、医学部専門予備校も本当にピンキリありますので、ここではあえて詳しくは言いませんが、よくよく自分の目で予備校の本質を見抜き、自分自身の現状に合った必要な指導をきちんと行ってくれる予備校を選ぶことが、まさしく合否を分ける大きなポイントになると思います。

平野 予備校選びのポイントを教えてください。

坂本 そうですね、ポイントはたくさんあると思いますが、まず“友達が行くから自分も行く”ではダメだと思います。次にネットなどの情報に惑わされないこと。ネットの情報がすべて正しいとは言えません。必ず自分の目で予備校をしっかりと見る必要があると思います。その上で表面的な数字上の合格実績だけではなく、その内容や本当に生徒のことを真剣に考えているの

か、医学部受験の正しい情報があるのか、またその情報を生徒に生かせる環境や学力を伸ばせる環境があるのか。こういったところを自分の目で確かめて、自分自身が一番頑張れるところを探すべきだと思います。

平野 最後に、医学部予備校の役割と使命について坂本学院長はどうお考えですか？

坂本 はい、これまでお話ししてきたように、医学部の教育カリキュラムが今後、大幅に変わることにより、今まで以上に留年者や退学者が増えていくことが今、懸念されています。極端な言い方をすれば、“医学部

に入ったからといって医師になれるとは限らない”そういう時代の中、“医学部へ合格させればそれでいい”“合格をさせることが仕事”という従来の予備校の考え方を大きく変えていく必要性を強く感じています。

他の学部であれば大学に入り、将来を考えていく中で、その将来の選択肢を広げる意味で良い大学を目指すことは大きな目標となり得ますが、医学部に入るという事は医師になるという事であり、医師になれなければ医学部に入る意味がなくなります。

今後、医学部を目指す予備校の大きな役割は、医学部に合格させる指導を行うことは当然として、医学部に合格させればそれでいいというのではなく、これからさらに大変になる医学部6年

間を見据え、その6年間でしっかりと頑張っていける下地をどう作り、医学部に送り出していけるのか？こういった考え方や役割が必要になってくると思っています。

平野 学力だけではなく、これからの医学部生にとって必要な力を持った受験生を育てることが重要であり、予備校がそのように変わっていく必要がある。また、生徒や保護者はそうした心ある予備校を選ぶことが重要であるということですね。今日は貴重なお話をありがとうございました。



学生の成長は環境によって大きく左右されます





富士学院 学院長 坂本 友寛

医学部を目指す 上において 知っておくべき 大事なポイント

平成28年度入試も多くの受験者が医学部を目指し、最難関の受験に臨みました。国公立医学部医学科はほぼ昨年並みの受験者数でしたが、私立においては、推薦入試、一般入試共に前年を更に上回る受験者数となり、理工系の高学力層の医学部へのシフトを含め、医学部人気は当分の間、続いていくものとみられます。今回はその難関の医学部を目指す上において必ず知っておくべき大事なポイントについてお話しします。

まず1つめは、医学部受験の仕組みを正しく理解する事です、受験の流れ、そしてどういう経緯で合否が確定していくのか！？ここを正しく理解する必要があります。入試の形式には様々あり、国公立においては推薦・AO入試、一般入試の前期日程・後期日程試験、編入試験などがあり、また私立においては推薦・AO入試、一般入試(後期試験を含む)、センター試験利用入試、編入試験がそれぞれあり、いずれも入試の形式により、入試の概要や要項が違ってきます。また出願先も私立であれば、受験日程が合えば一般入試は何校でも受験が可能です。国公立は前期日程、後期日程共に1校ずつしか出願ができません。また国公立入試においては、センター試験の総合点と各大学が課す二次試験(足切りも有り)の結果で主には合否が判定されますが、私立の一般入試においては英・数・理科二科目の計四

科目(一部大学は三科目)の総合点で一次合格者を選別し、一次試験合格者のみが、それぞれの大学が課す二次試験を受験して、国公立同様、大学毎の合否判断基準により合否が決定されます。まずはこの様な入試の仕組みやその内容を正しく把握する事です。

2つめのポイントは、入試の概要や要項は大学毎で違い、合否判断の基準も大学毎で大きく異なるという事です。その違いは学力試験の出題の範囲から傾向そして配点基準、また面接試験のやり方から評価基準に至るまで全てが違う為、受験には大学毎の最新の入試情報が必要となります。もっとも、いくら情報があっても、それをきちんと生徒に生かせる環境がなければ全く意味がなく、そういった学習環境も合格を勝ち取る為に必要な要因となります。

3つめのポイントは、現在多くの大学で実施

されている推薦入試を利用する事です。推薦入試は一般入試と比べ、いくつかの出願資格が必要なため、受験者数が限られ、出願資格のある受験生にとっては大きなチャンスとなり得ます。出願の資格は各大学で異なりますが、概ね高い評定平均値が必要ですので、学校での生活や成績において一定以上の評価が求められます。推薦入試については概ね専願制をとっている大学が多く詳細については入試を実施している大学又は私どもまでお問い合わせください。

4つめのポイントは、入試では合格最低点を意識するという事です。総合点で合格最低点をいかにクリアするかが合格の鍵となります。その為には科目毎の得点バランスや時間配分を考え、できない問題は捨てる勇気も必要です。入試にはこの事を強く意識して臨んでください。

5つめのポイントは、医学部入試には当然高い学力が必要ですが、他の学部の入試と違い、ただ単に学力だけを競う入試ではないという事です。医学部に入るという事は、医師になるという事であり、学力だけではなく、医師としての資質も問われる事になります。面接試験や小論文試験が多く、多くの大学で課されているのもその為です。また学力試験においても、医師としての大事な資質である粘り強く思考できるかを問う医学部独特の入試問題などが出題される為、全国模試で高い偏差値を取っていても、また学校で優秀な成績を取っていても、それがそのまま医学部合格には直結しないというのが、医学部入試の大きな特徴です。現役生にとっては、学校の勉強だけではなく、更にプラスして医学部入試の為の勉強や具体的な対策が求められます。

6つめのポイントは、日々頑張り努力をし、ひとつの目標である医学部合格を果たしても、それはゴールではなく医師になる為の新たなスタートであるという強い意識と自覚を持つ事です。医学部受験は難関の為、医学部に合格する事が大きな目標になりがちですが、目標はあくまでも医師になる事であり、医師として活躍する事が本来の目標となるべきです。しかし

現実には合格が最大の目標となり、合格という目標を達成したことにより、いわゆる「燃え尽き症候群」となり、医学部での新たなスタートを切れない医大生がいる事も事実です。大学側はあまり公表していませんが、現在のカリキュラムにおいても、多くの留年者や退学者がいる中、今後全ての医学部で実施される国際基準に準じた新たな医学教育カリキュラムの導入は、今以上に留年者や退学者を出していく危険性を秘めており、極端に言えば“医学部に入ったからといって医師になれるとは限らない”そういう現実が待っている事も意識してもらいたいと思います。もっとも、医学部6年間も、更には医師になってからも、勉強は常に必要であり、勉強とは生涯向き合っていくという覚悟も必要です。それでは最後の知っておくべきポイントについてお話しします。

7つめのポイントは、医師としての仕事は大変ですが、やりがいのあるとても素晴らしい仕事だという事です。今までたくさん厳しい話をしてきましたが、医師としての仕事は、命と向き合う責任のある仕事です。だからこそ様々な壁を自らの力で乗り越えていく事が求められます。しかしその壁を乗り越え、医師として活躍していく中での大きな充実感ややりがいは、何事にも代えがたく、また患者さんやその家族から頂くたくさんの感謝の言葉は、医師として頑張っていく上での大きな糧となり励みになると、富士学院OBのドクター達は皆、話をしてくれます。今医学部を目指して頑張っている皆さんも、このやりがいや大きな充実感のあるドクターを目指し、ぜひ自身の目の前にある壁を自らの力で乗り越え、医師への道をまっすぐに、そして一步一步着実に歩んでもらいたいと心から願っています。

お問い合わせ先

医学部受験 富士学院 P42をご覧ください



医学部面接者の 視点を知り 真摯に向き合ってほしい

医学部の面接は、それぞれが異なった質問を投げ掛けて独自の評価をしている。したがって、通り一遍の対策であったり表向きだけの言葉だけで飾ったりするのでは決して好評価につながらない。まずは、なぜ様々な面接が行われるのか、どういう視点で質問をされるのかをよく知っておく必要があり、それを踏まえて真摯に向き合ってほしい。

富士学院 参与
(元医学部事務部長)
渡辺 弥千雄

受験生は面接の“正解”を求めている

ほとんどの大学で質問がある「医学部志望理由」と「本学志望理由」。受験生はいろいろな応答をします。書いた文章を一字一句丸暗記して話しをしている、親が医者で漠然と医学部を受験しようとしているから志望理由を話さなくて困っている、間違いなく誰かに教えてもらったであろう整然過ぎる志望理由、それなりに医師になりたい理由はあるが“上手い”話し方が分からない、その大学のパンフレットを見て上っ面の言葉で大学の

魅力を語る、などなど。もちろん、中には自分や家族の入院の経験などからしっかり志望理由を話す人もいますが、「質問に対して何と答えれば評価が高くなるのか」という“正解”を模索しているものが大半であるという感じを受けます。

面接で答える内容には、“正解”というものはありません。富士学院発刊誌「あしたのひと」vol. 4、2 頁に書かれているように、面接は「この質問にはこう答えたら評価が上がる」というものではありません。「何と答えたか」という内容よりも「どういう答え方をし

たか」が大切なのです。

まずは、医学部面接試験の意味するところを理解してください。

面接試験の意味するところと アドミッションポリシー

医学部には、それぞれが「求める人材像」、いわゆるアドミッションポリシーがあります。面接者は、これを踏まえて志望理由以外にもさまざまな角度から質問をするのですが、これには一つひとつ意味があるのです。それは何か？いくつかのアドミッションポリシーのうち多くの医学部に共通する、特に大事なポイントに絞ってその理由を説明します。

- 医師になろうとする意欲、情熱がある人
- 学ぶことへの集中力、忍耐力、持続性を備えている人

医学教育の6年間は、体の臓器、神経、筋肉などの名称やすべての疾患名、疾患のさまざまな原因、その治療方法など、覚えなければならない知識の量が膨大です。医師になりたいという気持が薄弱で「入学すれば卒業までは何とかなるだろう」と考えている人や、集中力に欠けたり粘り強く地道な努力を持続することのできない人は、学習量の厳しさに途中で心が折れたり疲弊してしまい、留年になる例は少なくありません。

また、卒業試験、医師国家試験に向けた5年生、6年生の集中学習の持続性が萎えて年末に向かって低下していった卒業できず、挙句には卒業浪人を続ける人も数多いのが現状です。

- コミュニケーション能力がある人
- 協調性が豊かな人

医学生生活は6年と長く、その間勉強のこと、友人や恋愛のこと、家族のことなどいろいろな悩み、迷うことが出てきて次第に落ち込み、授業を欠席しがちになり留年してしまう学生がいます。他人の言葉に対する理解力が

あり言葉のキャッチボールができる人はコミュニケーション能力があり、相談できる友人も多く独りで悩み落ちこんでいくことがほとんどありません。

医師になれば多種の患者さんに対応することになりますが、症状や生活状況などを患者さんに上手に問いかけ、その声を聴き取って病気の原因を特定していったり、言葉で安心感を与えられる臨床医が求められています。

また、医療はチームワークですが、独りよがりで仲間のスタッフの意見や考え方をあまり受け入れられず協調性に欠ける医師はチーム医療には不向きです。仮に個人で医院を開業しても、看護師を始めとするスタッフと協調できなかったりコミュニケーションが取れなければ円滑な運営が望めません。

特に私学は、単に学力が優秀というだけではなく6年間こつこつと努力して、卒業はもちろん国家試験をクリアして、医療チームや患者さんに信頼される医師になれる人物かどうかを少しでも見極めたいと面接を重視しているのです。そう！面接試験は「医学部入学適否試験」ですが、「医師適否試験」でもあるのです。

面接者と真摯に向き合う

「この受験生はモチベーションが高い。医師になろうとする思いが伝わってくる」、「いかにもコツコツと努力していくタイプ」、「我々とキャッチボールができる」、面接者は一様に「入学させたい」と思います。誰も「良い答え」など期待してはいません。面接では、逆に小手先で相手をかかわすようなスタンスは、直ぐ見抜かれてマイナスになります。真摯に面接者と向き合うこと、そしてまず6年間、その後もしっかりと頑張って医学・医療の道を進んでいくという覚悟と姿勢で臨んでほしいと思います。



医師をめざす“あなた”と共に歩む

富士学院

生徒の為に
出来る事を全力で

をモットーに医学部予備校を全国に展開。

6校すべてが直営校、学生寮を含め、
生徒たちの食生活と健康を考えた食堂を完備

富士学院は、医学部を目指す生徒の為に「医学部受験予備校」として1995年2月に福岡の地で創業し、現在創立22年目を迎える歴史と実績のある“医学部予備校”です。

校舎は南から鹿児島校、福岡校、今年2月に開校した小倉校、そして岡山校、名古屋校、同じく今年2月に開校した東京校をはじめ、現在全国に6校舎を直営校として運営しており、

各校舎にはそれぞれ男子寮、女子寮と食堂が完備されています。

食事は各校舎共に専任の栄養士が生徒達の好みや、栄養バランスを考えた、あったかくておいしい料理を、日曜祝日を含む毎日3食提供しており、生徒達からも大変好評を得ています。月に一回の“料理長スペシャルメニュー”は、各校舎の料理長が競い合ってメニューを考えており、毎月どんなメニューになるか生徒達の大きな楽しみの1つにもなっています。食堂は、中学生、高校生などの現役生や来院生も利用する事ができるようになっています。

ビジネス優先ではなく、
生徒を“教える”という真の教育を実践

「成績至上主義」や「ビジネス優先主義」が行っている現在の教育業界において、富士学院では徹底して教育の原点でもある“教える”という真の教育を、実践していく事をモットーに、講師・職員が一丸となって生徒目線で指導を行っています。

指導の中心は高卒生を対象とし、年間を通して受験科目の全てを指導していく「富士ゼミ」と、いつからでも、また一科目からでも受講する事が可能な現役生、高卒生を対象とした「個人指導」の2つの大きな柱があり、その他推薦入試の対策講座をはじめ、生徒毎に必要な対策指導も随時行っています。

富士ゼミには「国公立専願コース」と「私立専願コース」そして「国公立・私立併願コース」の3つのコースがあり、毎週月曜日から金曜日まで、祭日を含め毎日授業を行っています。土曜日には、その週に習った内容の週テスト（確認テスト）を行い、日曜日は夕方18：00まで自学習を行います。クラスは1クラス8名以下の少人数クラスで、科目別・学力別のクラス編成授業を行っています。1日の流れは朝7：30から朝学習が始まり、9：00から授業がスタート、授業は夕方まで行い、夜は19：00から22：00まで、生徒毎に必要な夜間補習や

自学習をはじめ、夜学習を行います。

また、毎日の夜学習や日曜日の自学習には講師や職員がきちんと付き、質問対応や生徒からの様々な相談事などの生徒対応を行っています。また、富士ゼミのカリキュラムには、4月～7月の上旬にかけて週に一回、体育の時間があり、日頃勉強だけに集中している生徒達にとっては、勉強の合間の良い気分転換になったり、リフレッシュが出来る大事な時間となっています。

富士学院の大きな特徴は、指導理念にもある“教える”教育を講師・職員が一丸となって実践している事です。ただ教えるだけではなく“育む”という生徒指導がきちんと意識できている事が、一番の特徴であると思っています。その“育む”という意識ができているからこそ、本当の意味での“生徒目線”ができ、“生徒の為に”という全体の空気感が生まれています。

チーム制による連携の取れた生徒指導の
体制と生徒管理システム

本来、講師は自分の教えている科目を伸ばす事だけを考えます。そしてその科目を伸ばすことにより合格を目指します。これはこれでとても大事な事ですが、受験は1科目だけではなく、受験科目全体の総合点で合格が決まります。総合点で合格最低点を取れば合格ができ、逆にたった1点でも下回れば不合格となります。

本気で生徒の事を考えると、また生徒の合格を本気で目指し、指導を行っているのであれば、講師は本来、自分の科目だけではなく、他の受験科目の事も意識をし、講師間が連携できる、もっと全体観に立った指導を行うべきです。また、予備校はそれを当然、全力でバックアップすべきです。しかし現実には、これが出来ていないのが実情です。

しかし、ここの解決に富士学院はこれまで様々な挑戦をし続け、ここ数年は生徒を指導する各科目の講師陣が、生徒の為にしっかり

と連携をする事ができるようになってきました。これが富士学院の大きな特徴の一つでもある、生徒を中心としたチーム制にもつながっています。今、富士学院では、生徒毎に生徒を指導する科目の講師陣と担任講師、教務担当が一つのチームとして、各科目の現状を共有し、合格の為に、又はその生徒の目標達成の為に、今何をやるべきかをチームで検討し、実践しています。

まずチームとして一番に検討する事は、課題の調整です。それぞれの講師がそれぞれの感覚で課題を出していたら、生徒はパンクするか、何から手をつけていったらいいのか、また誰の言う事を聞いたらいいのか迷ってしまいます。

そうすると、現状の中で本来は今やるべき事があるにも関わらず、自分の好きな科目だけをやったり、課題の提出にうるさい講師の科目を優先してやったりと、まさしく本末転倒の状況になってしまいます。一番大事な事は、生徒毎に違う現状の中、合格に向け今何をやるべきかを生徒と共にチームで共有し、課題の調整も行いながら、生徒自身が目標に向かい、安心して頑張れる環境づくりと、勉強に集中できる環境づくりをしっかりとつくっていく事です。

また、このチーム制は様々な入試の情報や入試データを、生徒にきちんと生かしていただける学習環境にも大きくつながっています。医学部合格を目指す上で、一番のポイントは“どこの大学に出願をするのか”です。そしてその対策をどう取っていくのか！？合格はまさしくこの部分で決まるといっても過言ではありません。ここを間違えると仮に力があっても合格を勝ち取る事は非常に難しくなってきます。

その出願先を決める上で大事なのが、大学毎の正しい入試情報の把握と本人の正しい現状分析の把握です。この把握をチームで行う事により、より正しい選択が可能となりま

す。そして講師や職員の、チームとしての意識や自覚が年々高まっていくにつれ、このチームとしての様々な機能が更に充実し、それは間違いなく現在の合格実績にも大きく反映されてきています。

平成28年度入試における国公立医学部医学科合格率83%の実績も、まさにこのチームとしての機能が更に充実してきた証だと思っています。またその他、富士学院には生徒の現状を正しく把握し、その後の指導に生かしていく為に自社開発された、「生徒管理システム」があり、週テストや、全国模試、学内模試、プレテストなどの成績管理から授業の出欠、遅刻、食堂の利用状況や生徒面談の細部の状況まで、様々な形で活用する事ができています。



東京校スタッフ

富士学院はいつも考えています。生徒にとって必要な理想の予備校とはどんな予備校なのか！？その理想を追い続け、ここまで日々努力をしてきました。10人の生徒がいれば10通り、100人の生徒がいれば100通りの指導法が必要なのが医学部受験です。これからも一人ひとりの生徒の目標達成の為に、そして生徒からの様々な期待にしっかりと応える為にも、講師・職員一同更に努力を続けていきたいと思っています。最後に、これから医学部受験をお考えの方で、受験に関するご質問やご相談がある方は、お気軽に各校舎へお問い合わせください。一人ひとりのご相談やご質問にしっかりと対応して参ります。

富士学院 OB 会

富士学院を卒業した生徒達で構成されている「富士OB会」は、医師として活躍しているドクターや医大生を中心に平成19年に発足し、現在メンバーは370名を超えています。OB会発足には、生徒達からの富士学院に対する感謝の思いや、学院としても大学に入ってから、そしてドクターになってからも、出来る限りの応援をしていきたいというお互いの強い思いが込められています。新入生や後輩のOBにとっては大学内にOB会の先輩がいる事により、色々な相談ができたりとOB会は医大生にとっても、頼もしい存在になっています。今後は大学の垣根を越え、診療科目の垣根を越え、今までにない横に大きく広がる医師の連帯をめざし、医療業界にも様々な貢献していきたいと考えています。

セミナー情報

富士学院では定期的に医学部受験に関するセミナーや各種イベントを校舎毎に開催しています。医学部を目指す上での必要な情報を様々な角度からお伝えしていますので、ぜひご活用ください。詳細は学院ホームページをご覧ください。

ホームページ：<http://www.fujigakuin.jp/>



現在富士学院は、学院創立20周年を記念して発刊する事になった医学部受験情報誌「あしたのひと」を年に3回発行しており、国公立大学、私立大学各医学部の学校訪問レポートや日本の医療に貢献した歴史上の人物の半生を取り上げた「醫人列伝」その他、医学部合格を目指す上での様々な有益な情報などを紙面にまとめ、高校やご家庭にお届けしています。



各校舎 お問い合わせ先

【東京校】 お茶ノ水文教環境から始まる良医への道。 男女各寮も完備。 〒101-0063 東京都千代田区神田淡路町2-23 菅山ビル2F・3F TEL.0120-01-9179 受付時間:平日・土曜 / 9:00～18:00 日曜・祝日 / 10:00～18:00		【小倉校】 富士学院校舎で唯一の男女内寮完備。 時間を最大限活用できる学習環境。 〒802-0014 福岡県北九州市小倉北区砂津3-2-18 0120-08-9179 受付時間:平日・土曜 / 9:00～18:00 日曜・祝日 / 10:00～18:00	
【名古屋校】 名古屋の都心ながら、とても閑静で 学習に集中できる理想の環境 〒450-0002 愛知県名古屋市中村区名駅3-8-7 ダイアビル名駅1F TEL.0120-9816-33 受付時間:平日・土曜 / 9:00～18:00 日曜・祝日 / 10:00～18:00		【福岡校】 オープンテラスや図書コーナー等、 施設充実の新校舎も合格を後押し。 〒812-0016 福岡県福岡市博多区博多駅南3-2-1 0120-5251-22 受付時間:平日・土曜 / 9:00～18:00 日曜・祝日 / 10:00～18:00	
【岡山校】 “学ぶ”にはこの上ない立地と環境。 岡山県外からの生徒も多数在籍。 〒700-0027 岡山県岡山市北区清心町3-27 TEL.0120-9179-00 受付時間:平日・土曜 / 9:00～18:00 日曜・祝日 / 10:00～18:00		【鹿児島校】 現役生と富士ゼミ生であふれる活気。 夜はOB医学生も生徒をサポート。 〒890-0046 鹿児島県鹿児島市西田2-21-3 NUビル6階・7階 0120-66-9179 受付時間:平日・土曜 / 9:00～18:00 日曜・祝日 / 10:00～18:00	